
腐敗天使ゾンビちゃん

午後の抹茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐敗天使ゾンビちゃん

【Nコード】

N1643N

【作者名】

午後の抹茶

【あらすじ】

ある日、主人公の部屋のゴミ箱から突然女の子が召喚される。しかしその子は何が目的なのか、主人公を驚かせることをしてばかり。

ちよっとモラルに欠けたコメディです。

話はすぐ終わっちゃいます。

腐敗天使だよ！ゾンビちゃん！（前書き）

撲殺天使ドクロちゃんの世界観にお邪魔しました。
頭が吹っ飛んだり、手足が消えたりする描写が多々あります。

腐敗天使だよ！ ソンビちゃん！

0

むかしむかし、あるところに何一つ問題のない幸せな一軒の家庭がありました。

父は真面目な公務員。母は心優しい専業主婦。息子は思いやりがあつて超美形で勉強が出来て歌がうまくて学校でも人気者の中学二年生。つまり僕です。

しかしそんな僕の輝かしい生活が突如崩壊してしまったのです。

父親が無職になったわけでも、お酒に溺れてしまったわけでもありません。

母親が浮気に走ったわけでも、死別してしまったわけでもありません。

単に見たことのない少女がゴミ箱から出てきただけ。

——彼女の名前はゾンビちゃん。

なんと彼女、一週間前に僕の部屋のゴミ箱から突然現れたのです。ええ、僕は二日間は気づきませんでしたよ。

しかし三日目の朝。『なんでやねん』というツツコミが入り、ゴミ箱がどんがらがっしょん。倒れました。

恐る恐る中を覗くと……なんと！ バラバラになった人間のパーツが入っているではありませんか！

偶然プラモデルが趣味だった僕は、ゾンビちゃんのパーツをかき集めて人間っぽくしました。

完成するとそこにいたのは見るも美しい女の子です。よかった。解体する手間が省けました。

それがゾンビちゃんと僕の出会いです。

これは僕という思いやりがあって超美形で勉強が出来て歌がうま
くて学校でも人気者の中学二年生と腐敗した天使の起こす異常な日
常のお話。

お味噌汁だよ！ ゾンビちゃん！

1

ある朝のこと。

僕は自分の顔を這う不気味な存在を察知して目を覚ましました。
見ると白くて柔らかい小さな手が、僕の鼻やら唇をいじくり倒しています。

「ん？ どうしたのゾンビちゃん？ まだ起きるまで時間あるよ？」

僕は眠気まなこで問いかけました。
けれど反応はありません。

イタズラ好きの彼女のことですからきつとまた、僕で遊んでいるのです。

「ゾンビちゃん？ いい加減にしないと僕怒るよ」

少し強めに言いましたがそれでも何の返答もありません。

僕は眠たい目をこすり、ゾンビちゃんの手を掴みます。
すると、

「ぎゃああああ——！！ 手っ！ 手っ！ 手しかない——！！」

僕は虫を払うかのように慌ててゾンビちゃんの手を薙ぎ払います。
すると、ゾンビちゃんの手（単体）はそのまま壁に当たり、ビタ
ンと音を立てて落っこちました。

そうです。ゾンビちゃんとはとてつもなく寝相が悪いのです。

毎晩のように自在に切り離せる手足、胴体を生かした恐怖体験をまざまざと見せつけてくれるのです。

「はぁ……」

僕はため息を吐くと、ゾンビちゃんの何故かぶるぶる震えてる手を『あーきもちわり』と言いながらつまみ上げ、彼女の寝床であるゴミ箱に入れておきました。

ついでに体育座りですやすや眠るゾンビちゃんの寝顔を見つめます。

こうして改めて見ると、クラスで二番目くらいにかわいいレベルの女の子です。狙うならこの辺って感じですね。

「んう……むにゃ……葵くん？」

ゾンビちゃんの目が覚めたようです。

ゆっくり辺りを見回してから、僕の顔をぱちぱちとかわいい瞳で見つめました。

そしてゾンビちゃんは自分の手が外れていることに気づき顔をポツと赤らめて言います。

「葵くん！ 私の手で……何してたの！？ まさか……！？」

「何もしてないよ！ 僕がいくら微妙なお年頃だからって、そんなもので絶頂をむかえようとは思わないよ！ 今日と言わせてもらっけどね、第一、ゾンビちゃんは自意識過剰なんだよ」

僕の言うことなんかどこ吹く風。

ゾンビちゃんは口をとがらせて言います。

「違うもん。自慰過剰なのは葵くんだもん」

「自、意、識。自慰じゃないよ！ 発電機みたいな言い方しないでよまったく！」

そんな僕をよそに、ゾンビちゃんはゴミ箱から這い出て伸びをしました。

んう。という悩ましい声が小さな口から漏れます。
続いてゾンビちゃんは首をまわしま……………。

——ごろり。

「ぎゃあああああ——！ 頭！ 頭！ 頭がはずれてるよゾンビちゃん——！」

——ごろごろごろごろ。

「ああいくう——ん！ ひろってええ——！」

転がった頭部、もといゾンビちゃんが言いました。

「ひろえるかああ——！ きしょくわるい！」

とはいえこのままにしておくこともできないので、僕はゾンビちゃんのメインディスプレイを直視しないように拾い上げます。

マネキンだと思えばいいのです。

ちよつと生温かくて、

ちよつとお喋りが過ぎて、

僕の方をジッと見つめてる。

そんなマネキン。

「むりだあああああ——！ キモいよ。キモ過ぎるよゾンビちゃん！—」

僕は泣き叫びながら拒否しました。

けれど部屋中を頭部単体でローリングされる方がもっと気持ち悪いので、仕方なく体に取り付けてあげます。

ぬうちより。（合体した音）

「ありがとう葵くん」

感謝したゾンビちゃんは満面の笑みで僕の手のひらをつかみます。僕の取り付けのせいでしょうか、ゾンビちゃんが前を向いていても、滝川クリステルの角度です。

けれど本人が気にしていないコンプレックスをあえて指摘するのも野暮^{やぼ}なので、僕は何事もなかったかのように話を続けます。

「もう。毎朝こんなんじゃないくつ命があっても足りないよ僕。ゾンビちゃんと違って僕の人生は一度きりなんだからね」

「そうやって葵くんはいつも私のことバカにして！」

「バカにしてるわけじゃないよ！ こういう年頃の女の子は普通、頭や手を外したりしちゃうだめなんだ」

「なんで？」

ゾンビちゃんは小首を傾げて尋ねます。

「それはね……」

「誘惑されちゃうから？」

「違うよ！ だから何度も言ってるように僕はそんなアブノーマルなことをしてでも女の子のぬくもりを味わいたいとは思ってないよ！」

「なあんだ。つまんないのー」

「つまんないの！ ほらっ、朝ごはん食べるよ」

僕はゾンビちゃんの背中を押しながら、一階のリビングに向かいます。

「あっ！ お味噌汁の匂いがするー」

ゾンビちゃんは大好物のお味噌汁の匂いを嗅ぎ取ると、シュタタタと忍者のように小走りで階段を降り去りました。
ただし、薬指を忘れて……。

「だああああ——！！ ぞぞぞ、ゾンビちゃん！ もうそういうイタズラやめようよ！ 階段に忘れていいのはガラスの靴だけだよ！ そんなもん落っこたつて誰も名乗り出る人なんていないよ！」

僕は階段を這っているゾンビちゃんの薬指を見て絶叫しました。
しかも指先が僕の方を向いています。見られているようで気色悪いことこの上ないです。

僕は、ゾンビちゃんの小指が死にかけのセミのように突然動きだ

さないか注意しながら階段を降りました。

「おはよう葵。昨日はよく眠れた？」

お母さんが、朝からぜえぜえ言ってる僕に尋ねました。

「全然。ゾンビちゃんが手とか足とか投げつけてくるから毎晩大変なんだ」

もちろんゾンビちゃん存在はお母さんもお父さんも公認です。それどころか一人娘が出来たと喜んで好きなものを買い与える始末。

週に一度のカレーもゾンビちゃんが来る前は中辛だったのに、今はゾンビちゃんのために甘口です。

この家はなにかとゾンビちゃんに激甘なのです。

「ねえねえ葵くん」

ゾンビちゃんがお味噌汁をズバズバすりながら僕を呼びます。

「なあに？」

「今日も学校いつちゃうの？」

座っている椅子から足を投げ出してパタパタしながら言いました。

「うん。すぐ帰ってくるから我慢しててね」

「やだよ！ そんなのつまないよ！」

僕から突き付けられたしばしの別れの宣告に、不安が胸いっぱい
に広がったゾンビちゃんは抵抗しました。お味噌汁をすすりながら

「義務教育なんだから仕方ないでしょ」

「ぶー。葵君は私と学校のどっちが大事なの？」

学校です。間違いなく学校です。

そもそもゾンビちゃんは僕の大事カテゴリの中に入っていません。
けれどそんなことを言えばゾンビちゃんは拗ねてしまいます。

ですからここは大人の対応をしっかりと見せてあげることが大事な
んです。

「ゾンビちゃん、あのね、僕たち人間っていうのは勉強をしながら
成長してきたんだよ。だからいっぱい勉強することってすつごく大
事なんだ……って聞いているゾンビちゃん？　なんで『あーまた始ま
ったよ長い説教が』みたいな顔を平気ですることができるの？　ど
ういう神経してるの？　あんたが聞いてきたんでしょ？　ちゃんと
最後まで聞こうよ」

ゾンビちゃんは両耳を外すと、テーブルの上に置いて僕の声をし
ゃットアウトしました。

こんなキャラクターで最後まで物語を続けていけるのか不安にな
るくらいの気色悪さです。

「じゃあ僕、そろそろ学校行くけど、ちゃんとお家で御留守番して
るんだよ？」

僕の念押しも虚しく、ゾンビちゃんは一度舌うちすると、片手で
『へいへいわかったよ』という仕草をしました。お味噌汁をすすり

ながら。

天国だか地獄だか、その中間だかわかりませんが早く帰っていただけるとありがたいのですが。

目玉親父だよ！　ゾンビちゃん！

2

「おはよう葵くん」

教室で僕に声を掛けたのはクラスメイトで彼女（になる予定）の菜久花みよ子ちゃんです。なのはな今日も笑顔の素敵な14歳です。

「……おはよう」

「あれ？　なんか元気ないね」

僕は事の一部始終を話すのが面倒なので、みよ子ちゃんにはうちの家に気持ちの悪いゾンビが住み着いているとだけ話してあります。

「だってゾンビちゃんが昼夜問わず突然ブレイクするんだよ？　もう僕……疲れたよ……」

込み上げてくる胃酸を押さえながら言いました。

「ゾンビちゃんって葵君の家に住んでる女の子のことだね？」

「うん、正体不明のゾンビ。何故か隙あらば僕を驚かそうとしてくるんだ。まあ僕もよくそんなのと一緒に暮らしてるなあって思うけど」

僕の話聞いていたみよ子ちゃんがあることに気づくと、いぶか

しげに聞き返します。

「もしかして……そのゾンビちゃんって、心臓の弱い葵君にトドメを刺そうとしてるんじゃない？……？」

そうなのです。実は僕の心臓は子供の頃から人一倍弱いのです。最近もゾンビちゃんの精神的猛威に心臓がギリギリ締め付けられる思いをしています。

「だから私が思うに、葵君はきっとゾンビちゃんに狙われてるんだよ」

うんうん、とみよ子ちゃんが二度ほどうなづきました。

「でもまさか……あのゾンビちゃんが……そんなことを？」

やりかねます。あの素性のわからない天使だか悪魔だかゾンビなら。

きっと僕を殺すようにと魔王の指令でも受けているのです。

「もし何か困ったことがあったら私になんでも言ってね。力になれるかわからないけど」

あなたの笑顔が僕の力です。

「それより……それなあに？」

みよ子ちゃんは話を変えると、僕の鞆からチラッと見えるナニカを指差して言いました。

正体は僕の趣味である8分の1フィギュアです。足を鞆からチラ

ツと覗かせています。

「ああ、これはね、佐々木に頼まれてて、今日渡す予定なんだ」

「ふーん。ちよつと見てもいいかな？」

「もちろん」

僕はみよ子ちゃんが自分の趣味に興味を持ってくれたことが嬉しくて、勢いよくフィギュアを取り出しました。

「どう？ このスラッとした足首。細い腰回り。そしてこの綺麗な顔……」

僕はそう言って少し引いているみよ子ちゃんに一つずつ部位を紹介していたのですが、その紹介が顔に差し掛かった時、不思議な光景が目に入りました。

本来大きな目に、筋の通った鼻と、薄い唇が乗っているはずの顔に、顔に、顔。

「ぎゃ ああああああ——！！ 目玉がつ！ めだめだ目玉がああああ——！！」

フィギュアの頭の部分はザックリもがれていて、リアルな目玉が首に刺さっていました。

スクール水着を着た巨乳美女のボディに眼球が一つキラリと輝いています。

しかも、動いてます!!!!

「最近のフィギュアってよく出来てるんだね」

みよ子ちゃんのはん気に、黒目が動き回るフィギュアを見て言いました。

そして僕はあることに気付きました。

こんな水木しげるの世界観を忠実に再現するゾンビを僕は一人しか知らないからです。

「こつ、これ！ ゾンビちゃんの左目だ！ 大きくて丸いゾンビちゃんの左目だよ！」

朝ご飯を食べている最中もゾンビちゃんは何故か右半分しか顔を見せていませんでした。

今思えばあの時すでに、フィギュアの顔をもぎって自分の目玉をぶつ刺していたのです。

「あんた……ゾンビちゃんなんでしょ！？」

僕は目玉に向かって問いかけます。

僕の指摘にバレたとも言いたげなそれはギョロギョロ視線を泳がせて焦っているように見えます。

「ほらっ僕の目をちゃんと見てよ！ なんで視線を逸らすんだよ！ ゾンビちゃんだからでしょ！」

目玉だけで口が無いため、ゾンビちゃんは喋ることができません。なので、いいアイデアを思いついた僕はそれを実行に移します。

「ゾンビちゃん！ これから僕の質問に答える時、『はい』の場合は黒目を右に向いて、『いいえ』の場合は黒目を左に向いて！ わかった？」

黒目がスーッと右に動きました。理解できたようです。
この時点でゾンビちゃん確定なのですが、続けます。

「あなたはゾンビちゃんですか？」

黒目は一瞬右に動いてから、左に移動しました。往生際が悪いです。

「あなたはお味噌汁が好きですか？」

ヒュツと瞬時に黒目が右に向きます。『はい』です。

僕とゾンビちゃんが変なコミュニケーションを取っていると、それを見ていたみよ子ちゃんが突然言いました。

「私も質問していいかな？」

「えっ？ いいけど何を？ こんな気持ち悪いのと話してもまともな情報は返ってこな……」

「ゾンビちゃん、葵君に好きな人はいますか？ もしこの中にいたらその子を見つけてください」

「ってちょっとみよ子ちゃん！？ そんなこと聞いちゃだめだって！」

僕の制止を振り切り、目玉はみよ子ちゃんを見つめています。当然です。僕はみよ子ちゃんのことを好きなのですから。

と思いきや、目玉はコンビニの監視カメラのようにクルクル回転して教室を360度見渡しました。

そしてある所で止まった黒目は、クラスの女子二十人中、二十番目にかわいいと噂される女子を濡れた瞳で見つめます。

「えっ……？ 葵君……ほんと？」

驚きと、困惑を隠せないみよ子ちゃんが僕を見て言いました。

「ちっ、ちがうよ！ ちがうにきまつてるじゃないか！」

僕は必死に否定しますが、それでも二十番目にかわいい女子はポツと顔を赤らめています。

さらに、しょーもない噂を聞きつけたクラスメイト達もたくさん集まってきて質問攻めを始めてしまいました。

「俺も聞いてみるぜ」と田辺が言います。

「なあなあ、葵は週6日もぞしてらってホントか？」

もしかしたら残酷な結末が待っているかもしれないと思い、一瞬肝を冷やしましたが、迷った挙句最終的に黒目は左を向きました。『いいえ』と真実を答えてくれて一安心です。

が、次に黒目が上に動く就一直線に下に降り、それから円を描くように一回転しました。

なんと白目をキャンバス代わりに黒目で『10』と表記したのです。

「うおおおお！！ 葵きもちわるいぜえ——！！」

あまりのハイペースに田辺の絶叫が教室に響きます。その間も、俺も、僕も、私も、あたいも（二十番目にかわいい女

子の声）、は止まりません。

僕は泣く泣く目玉に向かって言いました。

「ごめん、ごめんよゾンビちゃん。のけものにして。もう学校来ていいからやめて。おねがいだから」

黒目は嬉しそうに右を向きました。

心臓破りだよ！ ソンビちゃん！（前書き）

あまり細かいことは気にしないでくださいね。

ゾンビちゃんの外れた眼球は、ピュツと取れて、パツと戻ったんです。

心臓破りだよ！ ソンビちゃん！

3

ホームルームが始まり、教壇に立った先生が出席を取っていきま
す。

おなじみの光景にクラスメイト達も飽き気味です。

「田^{たなべ}辺」

「はい」

「千^{ちは}葉」

「はい」

「手^{てしま}島」

「はい」

「と……」

呼びなれているはずの先生が珍しく言葉をつつかえました。

出席簿をまじまじと見つめて名前を確認しています。

いつもならここで戸田君の名前が呼ばれるはずですが、どうした
のか今日はなかなか呼ばれません。

先生は出席簿に記された文字を疑いながら改めて言い直しました。

「とり……かぶ……と？　鳥兜さん？」
とりかぶと

先生はそう呼びますが、こんな猛毒みたいな気持ちの悪い名前の人がうちのクラスにいたでしょうか？

するとそんな僕の感情を裏切るかのように、後ろから元気のいい声が聞こえました。

「はぁあい！　はいっ、はいっ、はぁあい！」

ゾンビちゃん！？

振り返ると、僕の真後ろの席にゾンビちゃんが座っていました。

豪快に両手を挙げているせいで腕が千切れそうになっていますが、お構いなしに自分の存在をアピールしています。

「ゾンビちゃんほんとに来ちゃったの！？　っていうか何この気持ち悪い名字！　全国に鳥兜さんって人がホントにいたらごめんなさいだけど下の名前と相まって気持ち悪すぎるよ！　それに後ろの席に座ってた岡湯さんはどうしたの？」

ゾンビちゃんは最近覚えたアニソンを鼻歌で歌って誤魔化しています。

本当に芯から腐りきったゾンビです。

仕方がなく僕はクラスの人気者である岡湯さんを自分で探しました。

「あつ！　あんなところに岡湯さんが！　どういことゾンビちゃん！！」

なんとゾンビ化した岡湯さんは『むもおお』という声を発しながら掃除用具のロッカーに頭を打ち付けていました。

残念です面白くて気のいい人だったのに。忘れません。

「だって席譲ってくれないんだもん！」

「やっていいことと悪いことがあるでしょ！？ それに鳥兜ってなんでそんなヘンテコな名字にしたの！」

僕の問いかけにひるむことなくゾンビちゃんはおかしなことをサラリと言います。

「なに言ってるの葵君？ 葵君の名字も鳥兜でしょ？」

「そんなわけないでしょ！ 僕の名前は鈴木。超普通の鈴木葵だよ……」

僕は先生が手に持っていた出席簿を『貸せっ』と言ってブン取ると、証拠を叩きつけるべく自分の名前を探しました。

けれどなかなか見当たりません。

それどころか気づいては行けない真実に行きついてしまったのです。

「あれ！？ このクラス鳥兜が二人いる！？ 誰だももう一人の鳥兜って、超気持ち悪いんですけどー！ 一人はゾンビちゃんで、もう一人は………あれっ！？ 僕だ！？ 僕になってる！！ しかもなんか修正液でいじってあるよ！ 誰っ？ 誰だよこんなイタズラした奴は！」

僕が教壇で興奮冷めやらぬ中、ゾンビちゃんが近寄ってきて言います。

「もうっ、葵君ってば！ 兄妹なんだから当然でしょ」

ゾンビのドヤ顔ほど腹の立つモノはありません。

「そもそも兄妹じゃないし、仮に兄弟だったとしても鈴木ゾンビでいいじゃん！ なんで僕の方が合わせなきゃいけないの!？」

「離れて暮らしていた葵君が私の家に戻ってきたって設定なんだからしょうがないじゃん」

頬を膨らませて言うゾンビちゃんの右ほほを殴って一気に空気を抜いてやりたい衝動に駆られますが、みよ子ちゃんがいる手前、そんなことはできません。腐っても、というか腐ってるけどゾンビちゃんも女の子なのです。

「なあなあ、ゾンビちゃんと葵の関係って結局なんなんだ？」と田辺が聞きます。

それに対しゾンビちゃんは震える声で何かに怯えながらぽつりと言いました。

「……異母兄妹」

さらに腕で胸を隠して『もうやめて』って目で僕を見えています。クラスの男子は『殺す』って目で僕を見えています。

「ちょっと!! なんでまるで僕に夜な夜な変なことされてるようない方するわけ!？」 誤解を招くからそういつのはやめようよ!」

「もうっ! 葵君はいつからそんなに冗談のわからない人になった

の？ 昔の葵君はそんなじゃなかった！ 昔の葵君はお化け屋敷で泣き出したり、遠足のバスでおもらししたり、授業サボって先生に廊下に立たされてたり、カニカマをカニだと思って満足してた時期があっただじゃん！ そんなだからカタカナの『ン』と『ソ』の違いがわかるまでに時間が掛かったんだもん！」

「そんな幼なじみの思い出知らないよ！ あんたと出会ったのは一週間前でしょ！ まったくテキトーなことばかり言って。ゾンビちゃんがいっただい僕の何を知ってるんだよ！」

「知ってるもん。私、葵君のこといっぱい知ってるもん！ 好きな食べ物がカレーライスで、好きな飲み物がコーラで、好きな小説が撲殺天使ドクロちゃんで、好きなコスチュームがスクール水着で、好きなシチュエーションが放課後で、好きな女の子の部位は……」

「それ以上言ったら僕、舌を噛み切って死ぬからね！ いいの？ ゾンビちゃん遊び相手がなくなっちゃうよ！？ 僕というじょう舌なおもちやが壊れて動かなくなっちゃうんだよ！？ いいの？ よけりや言ってみろよこらあー！」

「おっぱいだよ」

サラッと言いやがりました音符付きで。

「てっ、てきとーなことを。先生っ！ この鳥兜さんとやらが嘘ついてまーす！」

「おまえも鳥兜だろうが！！」

出席簿を乱暴に貸せと言われたことを根に持っている先生は僕に

怒鳴りました。

「てきとーなんかじゃないもん！ 葵君の机の引き出しの三番目の中に入ってるノートに女子全員のデータが書いてあるもん！ AB Cってそういうことだよな？ ねっ？ 葵君？ あと、Dに二重丸が付いてるのはなんで？」

僕の額からは相撲部主将のかくような汗が溢れて止まりません。そしてそれは僕がクラスの女子全員の殺意に満ち満ちた視線を感じていたその時に起こりました。

突如、僕は心臓が何か強烈な力で握りつぶされているような感覚に襲われたのです。

「ううっ！」

僕は声にならない悲鳴を挙げました。

クラスの誰も駆け寄ってきません。先生さえもです。おいこらおまえら。

ただ一人、ゾンビちゃんを除いて。

「葵君？ どうしたの？ 大丈夫？」

あんたのせいだよと言いたかったのですが、僕の心臓がそれを許しません。

そして、そんなゾンビちゃんの心配する声が聞こえたのを最後に、僕の意識は途切れてしまいました。

教室にはゾンビ化した岡湯さんのヘッドバンギングの音だけが響きます。

心臓破りだよ！ ソンビちゃん！（後書き）

ファンの方に怒られそうで恐いです。

いまさらだよ！ サバトちゃん！

4

「早く目覚めろですう」

下っ足らずな女の子の声とマグニチュード8の振動で僕は目を覚ましました。

僕の顔を覗き込む声の主は、羊のような角が二本伸びている不思議な女の子です。

「君は誰？ ここはどこ？ 君は寝不足？」

「わたくしゾンビちゃんと幼なじみのサバトともうしますう。そしてここは保健室のベッドですう。目の下にクマがあるのは仕様ですう。お気になさらずにい」

「僕は、急に心臓が痛くなって倒れたんだよね？」

間髪いれずに僕はサバトちゃんに質問しました。

「はい。葵くんの心臓は役立たずだったのでその辺に捨てたですう」

サバトちゃんがとんでもないことを言うので、冗談だろと思いつつ、辺りを見回してみます。

するとそれはゴミくずのように捨ててありました。

僕の心臓は死にかけの鯉みたいに地面でひくひくしています。

「ぎゃあああああ——！！　なんか弱ってるよ僕の心臓！
！　ホコリとかクルクルつとした変な毛が山盛りついてるし！！
はやくたすけなきゅあー！！」

「落ち着くですう。あなたには新しい心臓が入っているから心配ないんですう」

サバトちゃんは暴れる僕の両肩をベッドに押さえつけて言いました。

「新しい……心臓？」

とつぴょーしもない内容なので話が全く飲み込めません。僕はシヨッカーにされてしまったのでしょうか。

それにもう一つ気がかりなことがありました。

「ねえ、ゾンビちゃんはどこ？」

僕は心停止を引き起こした張本人を探して、あんなことやそんなことでオトシマエを取ってもらおうと周りをきよろきよろ見回しました。

しかし僕の質問に、サバトちゃんの表情は突如曇ります。

「そつ、それは……。まだ……会えないんですう……」

サバトちゃんは突然、焦り始めました。絶対に重要な何かを隠しています。

だからとりあえず身体検査を……じゃなくて、ボディチェックを……でもなくて、とにかく隠し事を吐かせなければなりません。

「まだ会えないってどういうこと？」

「会えないものは会えないんです。黙って寝てるです。」

「君が起こしたんじゃないか！ 隠さないで教えてよ！」

僕はサバトちゃんの角を二本つかんでグリグリして迫りました。
あわよくば、あわよくばこのまま押し倒して……ついに僕も大人の階段を……。

そんな僕のガラスの十代が音を立てて崩れさる瞬間のことでした。

「やめるですう！ ゾンビちゃんは葵くんに心臓をあげたんですう！
だからゾンビちゃんはもう……もう……」

僕は自分の耳を疑いました。

「え……？ それ……どういうこと……？」

「そうしなければ葵くんは助からなかったです。」

まさかゾンビちゃんがいつも手足その他もろもろを外して僕を驚かせているように、自分の心臓を外して僕に……？

僕は湧きあがる悲しみを必死に押し殺しながら、サバトちゃんに言います。

「ありがとう。これで僕の生活に平穏が戻ったよ（にこり）」

ちっがぁあああああああ——うう！！
本当に僕は人の子ですか！！

「なんで……ゾンビちゃんが僕なんかのために？」

そうです。大事なそこです。

僕は極力人の子らしく振舞いました。

「ゾンビちゃんはサバトと同じルルティエに所属する天使なのですよ。ゾンビちゃんはルルティエから葵くんを助ける使命を受けていたですよ？」

「僕みたいどこにでもいる中学生を助ける意味なんてわからないよ……」

僕がうつむいて言うと、サバトちゃんは僕の両手を包み込むように握りました。

そして近距離で僕に向かって言うのです。

「葵くんは……未来の救世主なんです」

「僕が……救世主……？」

「はい。あなたと同じ学校の草壁桜くんが将来、世界中の女性の外見年齢を十二歳で止めてしまう技術を開発するんです」

「え？ そんな気持ち悪い奴が僕の学校にいるの？」

「はい。そこで将来葵くんは桜くんの技術を破壊する反草壁勢力のリーダーになるです。けれど、破壊直前、持病の心臓病の悪化で葵くんはお亡くなりになってしまいです。だからゾンビちゃんの使命は今のうちに葵くんの心臓に心停止を引き起こして、役立たずの心臓とゾンビちゃん自身の心臓を取りかえることだったのです」

驚きでした。

あのゾンビちゃんの不可解な行動が全て僕のためであり、世界のためだったなんて。

「僕は……」

サバトちゃんの目をまっすぐ見据えて言います。

「嫌だよ反ロリコン勢力のリーダーとか！ 超かつこわるいよ！
そんなのに人生浪費したくないよ！ 僕は公務員になって家族四人で幸せに暮らすんだ！」

「それは無理ですう。葵くんは大学に三浪で入学して、二年留年してなんとか卒業するものの、公務員試験には落ちて、ビルの屋上で飛び降りようとする瞬間に、やけっぱちになって反勢力を立ち上げることになってるですう」

「最低の人生じゃないか！ 僕は今すぐ飛び降りたくなつたよ！」

僕の人生は中学二年生にしてお先真つ暗です。脳裏にゲームオーバーの文字が横文字で浮かびました。

「だから……ゾンビちゃんのことは諦めてくださいですう」

「うん、それは諦めるけど」

「え？（サバト）」

「え？（僕）」

その時、何故か僕の（元はゾンビちゃんの）心臓がメリメリと音を立てて怒った気がしました。

僕は地面に落ちていた旧僕の心臓が完全に停止したのを自分の目で確認するとベッドから起き上がります。

「はあ。ゾンビちゃんいなくなっちゃたのか……。お別れも言っていないのに……」

救出作戦だよ！ゾンビちゃん！

5

僕とゾンビちゃんの不思議な共同生活は一週間で幕を下ろしてしまいました。

ロボットの様に飛び出す腕。

ピンボールの様に跳ねる目玉。

黒ひげ危機一髪さながら吹っ飛ぶ頭。

今となつては全てどうでもいい思い出です。

「ただいま！」

僕は元氣よく自宅のドアを開けました。

お母さんはパートに出掛けていて誰もいません。

いつも僕を全速力で玄関まで迎えに来るゾンビちゃんも、もういません。

「ゾンビちゃん……」

僕は堪え切れなかった涙を零してしまいます。

本当はゾンビちゃんとの思い出がどうでもよかったと思ったことはありません。

「今朝はここでお味噌汁をズバズバ飲んだのに……」

ゾンビちゃんが座っていた席に視線をやりましたが、やっぱりそこには誰もいません。

僕は自分の部屋に向かうために、重い足取りで階段を上りました。すると、

「あっ！ これゾンビちゃんが今朝階段に落として行った薬指だ！」
相も変わらずうねうねしてて気持ち悪いです。

「ってというか何で動いてるの!？」

そうです。問題は気持ち悪さではなく動いていることにあります。ゾンビちゃんは僕に心臓をくれた代わりに死んでしまったはずなのに、僕の目の前には半端じゃない生命力を見せるゾンビちゃんの薬指があります。これはいったい……？

そう思った僕に一つの考えがひらめきました。

「あっ！もしかしてゾンビちゃんはまだ生きて……」

そう思ったのもつかの間、突然ゾンビちゃんの薬指は玄関に向かって移動し始めました。

「ズリ……ズリ……ズリ……ズリ……（ゾンビちゃんの薬指が這いずり回る音）」

薬指は確実に前に進みながらも時折り、僕がちゃんと付いて来ているかを確認しているかのように振り返ります。

ハイレベルな気色悪さに猛烈な吐き気が襲ってきました。それでも僕は口を手をあてながら懸命に薬指を追いかけます。

「待ってゾンビちゃんっ！ の薬指！」

薬指は玄関を突破し、公道に出ると、ちゃんと歩行者側を這いずり回ります。

時どき溝に落ちそうになりながら、時どき犬に食べられそうになりながらも、一生懸命です。

僕もゾンビちゃんの期待に答えるべく、ガラスの靴を探す王子さながら、薬指の持ち主の居所を必死に探します。

「ズリ……ズリ……ズッ」

そして薬指は河川敷まで来ると、ぴたりと停止しました。これedyと気持ち悪い音を聞かなくて済みます。

爪が指す方向にはビニールシートで出来たテントがあります。いかにもな人が住んでそうなあれです。

僕はテントの入り口を手で開くと、中を覗きました。

「あれ？ 誰もいない」

部屋を見渡してみると変なもので溢れかえっています。

微生物フィギュア付きの食玩に、コンビ二袋の山。変わったスタンガンもありました。

怪しすぎます。なんらかの犯罪に関わっていない方が不思議なくらい怪しいです。

「なにこれ？」

僕はテントにある物の中でひときわ目を引く段ボールを発見しました。

段ボールには『ルルティエゆき』と書かれていて、ガムテープで何重にも巻かれているうえ、何故か小刻みにぶるぶる震えています。

「ぶるぶるぶるぶる（ゾンビちゃんの薬指が震える音）」

なんと二つが共鳴しているではありませんか！

僕は急いで段ボール箱を破り開けようと思いました。

ちぎっては手に付くガムテープが鬱陶しいため、食玩に塗りつけておきます。

「ゾンビちゃん！ ゾンビちゃんなんでしょ！？」

まだその姿は見えませんが、僕はたまらず声を掛けます。

「あ……お……」

かすかにですが段ボールの中から声が聞こえます。

何で心臓を失ったゾンビちゃんが生きていたり、こんなところに閉じ込められているのか不思議なことは山ほどありましたが、今は目の前の問題を解決する方が先です。

「待っててね！ すぐ助けるから！ お別れもなしにいなくなっちゃうなんてそんなの許せないよ僕！」

「だ……め……にげ……て」

またも中から声が聞こえます。逃げてと僕に何かを警告しているようです。

「そんなことできるわけないよ！ それに……僕だけ一人で鳥兜の名字で学校生活を送るなんて耐えられないよ！ ゾンビちゃんにはちゃんと兄妹として責任を取ってもらうからね！」

僕は最後のガムテープをめくりあげると、段ボールを乱暴に開きました。

そこにいたのは出会った頃と同じく手足その他もろもろがバラバラの状態になっているゾンビちゃんです。

うげ。ちょーきもちわるいんですけどー。

「今組み立ててあげるから！」

紳士的な僕は吐き気を堪えて冷静を装います。うぷっ。

「だめだよ葵くん！ そんなことしてたら来ちゃう」

「何が？ 女の子の曰？」

「葵くんのほかぁ！」

その刹那、背後から声が聞こえました。

「なーにーしーてーるーでーすかぁ？」

振り返るとサバトちゃんがバチバチと怪しげに光るスタンガンを持って立っていました。

遅刻厳禁だよ！ ドクロちゃん！

6

「ひどいよサバトちゃん！　なんでゾンビちゃんにこんな仕打ちを！？」

僕は背後にいたサバトちゃんに振り返って言いました。

「役目は終わったはずなのにゾンビちゃんがルルティエに戻ろうとしないのですう」

サバトちゃんは本来女子中学生には必要の無いスタンガンを片手にため息を吐きます。

バラバラになったままのゾンビちゃんも反論しました。

「だって私、ずっと葵くんの……」

ゾンビちゃんは声を詰まらせながら、寂しそうな瞳で僕を見つめます。

「ずっと葵くんの……お家でお味噌汁飲みたいから」

「帰れよ！　お土産にお味噌やるからどこにでも帰っちゃえよ！　ポンコツ天使！」

僕は開いていた段ボールを足で蹴り上げて閉じました。

「サバト……葵くんの気持ちはよくわかりました」

「うん、わかってくれた？」

「はい。面倒なので葵くんも桜くんも両方を抹殺すればいい話ですう！」

「ちょっと！ 僕の話ちゃんと聞いてた！？ どこにでも帰れって言っただけじゃん！ ジャンク品ですがどうぞご自由にお持ち帰りくださいだよ！ だから邪魔しないから抹殺とかそんな野蛮なことは……」

「バチバチバチ（スタンガン——別名ドウリンダルテの音）」

「だれかああああ！ 助けて殺されるううう——！！ 痺れる焦がれるううう——！！」

僕は誰でもいいから出来るだけ強い人に助けてもらおうと思って女子のような悲鳴をあげました。

すると、そんな悲鳴を聞きつけてミニチュアダックスフンドを散歩させていた女の子が駆け寄ってきたではありませんか！

「ちょっと頼りないけどよかった。これで警察に……」

女の子が徐々に近づいてきました。

何かを手に持っています。

左手には犬のリード。

右手には……。

——鋼鉄のトゲトゲバット！？

「あつ！ サバトちゃんなにしてるの？」

人を殺す以外には使い方のわからないバットを持った女の子がサバトちゃんに声を掛けました。

最悪の事態です。警察を呼んでもらうどころか、この子はサバトちゃんの知り合いでした。

「ドクロちゃん、聞いてくださいですう。サバト……サバト、うつ、うつ、このどこの馬の骨かわからない男に体を……」

サバトちゃんの三文芝居を見ていたドクロちゃんは僕をキツと睨みます。めっちゃめっちゃかわいい顔をしているのに、瞳の中に宿る殺意は本物のような気がしてなりません。

「そしてドクロちゃん、あれを見てくださいですう。ゾンビちゃんはこの男にバラバラにされたですう。次はきっとサバトの番ですう。この男は『女子中学生ダンボール詰めバラバラ殺人事件』の容疑者なんですう！」

「ちよつと何言ってるんだよサバトちゃん！ 僕はそれ以上に凶悪な犯罪を聞いたことがないよ！ そんなことができるわけないですよ！！！」

僕の言い訳も虚しく、ドクロちゃんは綺麗な深緑の瞳で僕を見つめてから聞きます。

「サバトちゃんの言ってることはほんとなの？ だったらボク許さない！」

「そんなわけないでしょ！　僕がそんな後世にまで残る凶悪犯罪をするように見える！？　だからお願いだからそんな人を殺めるために開発されたようなバットで僕を見据えないで！！」

必死すぎる僕を見て、ドクロちゃんは唸りました。

「ううん、じゃあ……君はほんとに連続婦女ばーこーはんじゃないの？」

「そもそも議論になってるのが婦女暴行じゃないよ！」

ドクロちゃんは首を傾げて僕の一拳手一投足も逃さんとはかりに見つめます。

「ほんとにほんとになんにもやってないの？」

「うん絶対！」

「ゾンビちゃんをバラバラにしてないの？」

「うん！」

「段ボールに詰めなかった？」

「もちろん！」

「体触っただけ？」

「うん、それだけ！」

「もうボク許さないよ！」

「ずるいよドクロちゃん！ ひっかけだよ！ 濡れ衣だよ！ どうせならホントに触らせてよ！」

僕は一つ学びました。天使は人の話を聞きません。

ドクロちゃんはグイッと腕に力を入れるとバットを水平に振りました。

「うわあああああああ——！！！」

僕は叫びながらも瞬時に屈みます。
すると僕の背後からも、

「——あああああああ——！！！」

と叫び声が聞こえたと思いきや、

「どうじゃあああああ——！！！」

ドクロちゃんの水平切り（バットなのに）は僕の後ろにいたサバトちゃんにクリティカルヒット。

サバトちゃんの体からは血がダムの決壊の様に吹き出し、臓器やら重要な部分がアーチを描いて吹っ飛んで行きました。心臓がホームランで、肺がツーベスヒットです。

「人殺しいい！！ 仮に僕がバラバラ殺人事件の犯人だったとしても君も同類じゃないか！ ここは合戦場ですか！？ なんでもありですか？ 武士だって情けとか持つてるよ！」

たいして悪びれた様子もないドクロちゃんは、サバトちゃんの力ツと目の見開いた頭部に近寄りました。

「あつ！ ごめんサバトちゃん。いますぐ元に戻してあげるから！」

そう言っでドクロちゃんはお茶目なバットを振り上げると、妙な呪文を唱えました。

——びるびるびるびるびる——

するとなんということでしょう！ ドクロちゃんが変な呪文を唱えた瞬間、無残な死に方をしたサバトちゃんが巻き戻し映像のように復活してゆくではありませんか！ 心臓がイチロー選手の返球のような速度で戻ってきます。

僕はあまりの衝撃映像に目が点になってしまいました。しかしチャンスはドクロちゃんとサバトちゃんの気が逸れている今しかありません。

僕は今のうちにテントからゾンビちゃんのパーツが一式入った段ボールを持って、衝撃の現場から離脱を試みます。

他の人から見たら役に立たないダメ天使でも、僕にとってゾンビちゃんは大切な命の恩人なのです。

一生一緒だよ！ ゾンビちゃん！

7

場所は変わり映えのしない僕の自室。

死の淵から生還した僕は段ボール箱から取り出したゾンビちゃんのパーツの取り付け作業をしながら話しかけていました。

「ゾンビちゃん……僕は今までゾンビちゃんのことをすごく誤解してたよ」

「ううん、葵くんにわかってもらえたからもういいの」

ゾンビちゃんは優しく微笑みます。ただし頭部だけで。

それにしても穏やかな表情。やっぱり天使だったんだなあっていう実感が改めてわきました。

「ねえゾンビちゃん？」

「なあに？」

「この指は右手の？ それとも左手の？」

大量にあるパーツを時どきこうやって本人に確認しながら慎重に取り付けていきます。というのもジグソーパズルよりも難易度が高いのですから。

「ちょっと見せて？」

僕は第二間接までしかない指をゾンビちゃんが見えるように差し出しました。

「これ……」

ゾンビちゃんは少し躊躇いながら何かを言おうとします。

「これ……私のじゃないよ」

「どうわあああああああ——！！ 誰のだよ！？ ちょーキメーよ！！ なんか臭いし！！」

僕は思わず手に持っていた指を砲丸投げの要領で窓の外に投げ捨てました。

確かにピクリとも動かず紫色に変色しているそれは、他のゾンビちゃんのパーツとはいまいち新鮮さが違います。あつ、野良犬が興味深々で嗅いでいます。

「それより葵くん……」

「まだ何かあるの？」

「ううん、違うの。私ね……」

ゾンビちゃんは一瞬言葉を溜めてから、

「ずっと葵くんと一緒にいたいの」

甘える子供のように言いました。

今度はお味噌汁が飲みなたいなどというふざけた理由ではありません、知恵を付けただけかもしれないが。

そんなゾンビちゃんの誠心誠意がこもった提案に僕はもちろん、

「……………うん」

「今の間はなあに？」

心なしかゾンビちゃんの声が震えているように聞こえます。優しく言っているつもりなんだけど怒りが隠し切れていないというか、殺意が隠し切れていないというか、恨めしいというか。

それにしても、ゾンビちゃんとずっと一緒にいるだなんて考えただけでも重い負債を背負ってしまったかのような気分になります。

けれどゾンビちゃんは僕の命の恩人ですし、無下に帰れと言い放つこともできません。

「ずっとつてどれくらいかな？」

聞いてみるだけ聞いてみようと思い、僕は恐る恐る尋ねました。

1週間でしょうか？

それとも1か月？

まさか1年？

それだけは勘弁してほしいところです。

「500年！」

「嫌だよ！ 無理だよ！ 拒否するよ！ 平均的な人生の6、7回分じゃないか！！ アメリカの懲役刑じゃあるまいし、もつと現実的な数字を提案してよ！！」

「じゃあ43年ならいい？」

「え？ どうして今度はもつと具体的な数字になったの？ それでも嫌だけど……って、あつ！！ まさかそれっ！！ 僕の寿命だ！？ そうなんですよ！？ せっかく新しく心臓もらって寿命が延びたと思ったのに、もう新しい情報が入ってるの？ 最悪だよゾンビちゃん！！ 絶対言っちゃだめなやつだよそれ！！ しかも今日本だとそこそ早い寿命じゃないか！！」

僕の超絶レジスタンスを無視してさらにゾンビちゃんはぽつり、と言葉を零します。

「……癌」

「聞いてないよ！！ 僕の死因なんて誰も聞いてないよ！！ もうやめてよ！！」

僕の体は度重なるストレスで今にもおかしくなりそうです。

そんな死の宣告を突き付けられながらも、パーツの取り付け作業は全て終わり、クラスで二番目くらいにかわいい女の子レベルのゾンビちゃんが完成しました。

「お願いだからさっきのは全部嘘ですって言ってよ！ いつもの冗談でしょ！？ やだよ癌だなんて！ ドッキリだったって言わないと、もっかいバラバラにしてさっきの誰か知らない人の指みたいに犬の餌にしてやる！！」

なんて最悪な人生でしょう。大学に三浪して、二年留年して、ビルから飛び降りようとして、反ロリコン勢力を立ち上げて、たいして何もせずに癌で死ぬなんて……。

そんな僕の気持ちなんて汲み取ってくれるようすもなく、ゾンビちゃんはむくりと元気よく立ち上がりました。

「でも……天使が死ぬまで一緒にいてあげるんだよ？ 葵くんも心強いでしょ？」

そう言つて微笑みかけるゾンビちゃんは間違いなく天使でした。うつすらと頭上に浮かぶ天使の輪が黄金色に輝いています。

そしてこの瞬間、確かに心強いなと思つてしまった僕はゾンビちゃんとずっとずっと一緒にいる羽目になるのです。

これは僕という思いやりがあつて超美形で勉強が出来て歌がうまくて学校でも人気者になるはずだった中学二年生といたずら好きで役立たずなだけで命の恩人である腐敗した天使が起こした異常な日常のお話。

おわり。

「嫌だよ！ 終わらせないよこんな形で！ 早く帰つてよお願いだから！」

「ねえねえ、葵くん。きょうお味噌の特売日だよ！？ 確実にげつとだよ！！」

「どうせまた僕のお小遣いで買えつて言うんでしょ！！ 僕くらいだよ、お小遣いの8割がお味噌で消えてく中学生なんて！！」

一生一緒だよ！ ソンビちゃん！（後書き）

ありがとうございました。

今度書くときは短編じゃなくて、長編でじっくりドクロちゃんが書きたいなあなんて思っています。
許されるのであれば（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1643n/>

腐敗天使ゾンビちゃん

2010年10月10日22時19分発行